

ダンボールコンポストの作り方

① 用意するもの

- イ. ダンボール（やわなものではなく、しっかりしたもの）
例) ヨコ46cm、タテ32cm、高さ29cm
- ロ. 基材（腐葉土20ℓ、米ぬか7ℓ）
- ハ. 底に敷く新聞紙かダンボール
- ニ. 虫除け用布製カバー
- ホ. シャベル
- ヘ. 通風のための台（プラスチックの網状の苗入れが便利、無ければブロックに乗せる）
- ト. 温度計（あると楽しみ）



② 準備

- イ. ダンボールを組み立て、底の外側をガムテープまたはクラフトテープで貼って付けます。
- ロ. 次に底の内側も縦に1本、横に2本テープで貼り付けます。
- ハ. ダンボールの上の部分の中へ折り曲げ、その端をテープで貼り付けます。
- ニ. 四隅の外側をテープでおさえます。
- ホ. 底に新聞紙かダンボールを敷きます。
- ヘ. 基材の腐葉土と米ぬかをよく混ぜて床を作ります（深さは約15cm）。

③ 生ごみを入れます

- イ. 生ごみを入れる量は、1日に最大1kgくらいまで。
- ロ. 生ごみを出来るだけ細かく、2～3cm程度に切ります。スイカなど水分の多いものは干して水分を切る。
- ハ. シャベルで床を掘り、その穴に生ごみを入れ、米ぬかを一握りか二握りかけてよく混ぜて、その上に基材をかけてシャベルでつつき埋めなします。
- ニ. この作業を毎日繰り返します。
- ホ. 床の温度は夏は60℃、冬は40℃くらいになります。生ごみ投入前に、温度計で測るのが楽しくなります。表面に白いカビ、糸状菌も発生し、盛んに生ごみを分解します。

④ 入れない方がよい生ごみ

私たちが普段食べるものは基本的になんでもOKです。とは言え、発酵分解が遅く、入れない方がいいものがあります。玉ねぎの皮・貝殻・鶏の骨・とうもろこしの皮や芯・梅干しの種・ナッツ類の殻・タケノコの皮などです。柑橘類の皮も小さく切るか、投入を控えてください。卵の殻は握りつぶして細かくすれば大丈夫です。生魚のアラや内臓、肉類は慣れてからにしましょう。初歩的なことですが、プラスチックの袋の切れ端や紙類などが紛れ込まないように注意しましょう。

⑤ 水分調整が大切

温度が上がらないときは、床に触ってみてください。乾燥しすぎていませんか？そのときは水分を足してください。握って、しっとりと感じられる適度な水分が、分解が進む条件です。（微生物は水分50～60%のときに活動が活発になり、繁殖しやすい。）



⑥ 注意事項

- イ. 発酵の盛んなときは、水蒸気が沢山発生しますので、ダンボールの土の上に新聞紙を置いて、水分を吸収させます。
- ロ. ダンボールが雨に当たらないように板やビニールなどでカバーします。
- ハ. 置く場所は湿度が少なく、風通しのよいところに。
- ニ. 虫が入らないように不要なシートなどでカバーします。
- ホ. 虫が発生した時は、乾いた土と多めの米ぬかを入れてよくかき混ぜ、温度が上がると徐々に死滅します。気になる時は中断して、死滅を待ちます。虫もこの地球上で私たちと共に生きる仲間なので、優しく見守りましょう。
- ヘ. 冬はなかなか温度が上がりにません。ぬかを多めにしたり、生ごみを細かく刻んだり、毛布などで保温をして、微生物の働きを助けてあげてください。使用済み食用油を入れると温度が上がります。春～秋で温度が上がらない場合は、ぬか不足か水分不足です。ぬかや水分を足して、しっとりさらさらに調整してみてください。

⑦ 堆肥として使います

生ごみを入れ始めて3ヶ月ほど経つと、生ごみの分解はほぼ終わります。堆肥は取り出して、袋に移し、2ヶ月ほど発酵させて熟成させます。その間、1週間に1度くらい袋から出して、土をよく混ぜ、風に当てます。堆肥として使う場合、目安としては1㎡当たり1kg。プランターでは1～2握り分を土によく混ぜて埋め込みます。

※この手引きは、以下の資料を参考に作成しました。

- ・クリーン武蔵野を推進する会発行「段ボール法 生ごみ活かす君」
- ・日野市生ごみリサイクルサポーター連絡会発行「ダンボールコンポストをはじめよう！」

問合せ 小平市環境部資源循環課推進担当
電話 042-346-9535